声明「『天皇代替わり』に際してのわたしたちの立場」

わたしたちキリスト者は、すべてのいのちが神によって造られ、愛され、救いへと招かれていることを信じるがゆえに、すべての人の尊厳と人権が守られ、平和と自由のうちに生きることができる世界を、常々より願い、そのために祈っています。

かつて天皇を「現人神」としてその下に諸宗教を統制する国家の体制の中で、日本のキリスト教は抑圧や弾圧を受けながらも、他方ではそれに同調し、福音を離れて国の要請に応じて神社参拝を行い、奨励し、アジア諸地域の人々にもそれを求めました。また第二次大戦下においては、天皇の名の下に行われる戦争に協力・加担するという罪を犯しました。敗戦後わたしたちは、これらの過ちを深い痛みをもって懺悔し、主にその罪を告白してゆるしを願うとともに、世界の、殊にアジア諸地域の人々に、また国内の人々に、ゆるしを請いました。

このように過去、天皇制との関わりにおいて苦しみを経験した日本のキリスト教の歴史を心に刻むとき、わたしたちは天皇制の問題に無関心でいることができません。敗戦後、平和の誓いの下、政教分離が果たされて天皇の神格化は退けられ、わたしたちは、民主主義に立脚して信教の自由を保障する憲法を手にしました。日本のキリスト教は天皇制による統制を脱し、いま一度イエス・キリストの福音に立ち返るべく、新たな歩みを踏み出しました。それゆえ、わたしたちは、イエス・キリストの信仰に固く立ってこれらのことを守り支えていくことが、神からわたしたちに託された責任ある「見張り」の使命であると考えます。

わたしたちはいま、日本国憲法下で二度目の天皇の「代替わり」を経験しようとしています。昭和から平成への「代替わり」において、わたしたちは「弔意」や「奉祝」の同調圧力を経験しました。またそこで行われた諸儀式は、大嘗祭をはじめその多くが戦前の国家神道に由来して、天皇を「神格性」を持った統治者のように位置づけるものでありながら、国の「公的行事」として公費による負担の下に行われました。

いま再び、新たな天皇の「代替わり」において同じことが繰り返されようとしている状況において、わたしたちは危惧と憂慮を禁じ得ません。これら天皇の「代替わり」に伴う諸行事が「公的行事」として行われること、また国が「奉祝」や新たな「元号」への同調を呼びかけたり強制したりすることは、わたしたちが大きな犠牲を払って手にした平和憲法に基づく民主主義、政教分離の原則、信教の自由を毀損して、再び天皇の名の下に軍国支配へと導くものではないかと危惧し、憂慮するのです。

わたしたちは、かつて天皇を「神」として戦争へと突き進んだ国のありように同調することで、世界の、殊にアジア諸地域の人々に、また国内の人々に大きな苦しみを負わせたことを省みるとともに、日本のキリスト教自らが味わった苦しみを想起して、天皇の「代替わり」に伴う諸行事のあり方に深い危惧と憂慮を表明します。それとともにわたしたちは、改めてイエス・キリストの福音に固く立って、すべての人が例外なく平等に尊厳と人権を守られ、等しく平和と自由のうちに生きることができる世界を祈り、希求し、目指す者であることを胸に刻みます。

2019年4月1日

日本基督教団東京教区北支区常任委員会